

課題図書の一部 最優秀賞

深見七海さん 法学部法律学科2年

課題テーマ：人生100年

『ここで死神から残念なお知らせです。』 榎田ユウリ著 / 新潮社

「『生』の呪い」

人生100年、とは言うけれど。本当に100年、生きたいですか。本当はもう少し早く死にたいと、長生きなどせず淡々と死にたいと、そう思うことはありませんか。希望を持つことがつらくなり、死など怖くないと、そう思ったことはありませんか。本作は、そんなあなたへの処方箋。

これは、終わった人生に無理矢理続きを作ってしまった人達と、彼らを正しく成仏させる死神の話。けれど、主人公は死神でも「彼ら」でもありません。死など怖くない、いつ死んだって構わないと嘯く、いわゆる引きこもりニート。世の中の「ああはなりたくないわ」を煮詰めたような人間でした。けれど、自分は彼とは違う、と自信を持って言える人はいるのでしょうか。周囲を救いたい、いつか奇跡が起きて幸せになりたいと願いながらも、世間が怖くて身動きが取れない。彼は良くも悪くも、人間味に溢れていました。

そんな人間らしい主人公は、ある日死神と知り合い、自身の死に気付けない人達を成仏する仕事を手伝うことになりました。既に終わった人生の、その続きを歩み続ける彼らは、未練や希望に囚われていました。それは「生」の呪い。生きたいという、輝かんばかりの原動力が、彼らの幕引きを許してはくれませんでした。私は最初、死神と出会った主人公が、死者との交流を通じて徐々に変わっていくのかと思いました。けれど彼は変わらなかった。変わる筈がありませんでした。誰かと出会っただけで変わる人なんて、この世に一体何人居るのでしょうか。終幕の直前まで、彼は「ああはなりたくない人」のままでした。日々を無為に過ごす、私と瓜二つ。

そんな主人公に、最後の最後に変わるきっかけを与えたのは、自身の死でした。自身の死を眼前にし、もう成す術がないことを知り、初めて彼は、生きたい理由を考えました。死にたくない理由を考えました。やれば出来たかもしれないこと、先延ばしにしていたことが、山のように出てきました。死神に「遅い」と言われ、「なぜやれたのにやらなかったことを、終わってから嘆くのか」と問われ、歯の根が合わぬほどに震えて、そして後悔しました。もっと、必死に生きればよかった。彼もまた、「生」に呪われていました。

本作は、正に生きることの意義を見失った私の心に刺さりました。私達は俗にいうさとり世代で、欲を持つことが苦手みたいです。「少年よ大志を抱け」とは言いますが、このご時世。期待をしては打ち砕かれ、期待をしないほうが楽だと知り、いつしか生への執着を捨てたつもりになっていました。最後の最後に、彼はそんな心の壁を破っていきました。その命をもって。

本当に、死が怖くないですか。思い残していることは、ありませんか。ずっと憧れていた夢は、何でしたか。きっと、見て見ぬふりをしているだけ。結局のところ、皆「生」に呪われていました。

彼は死にました。しかし、ページはその先へと続いています。それを幕引きのその先と考えるか、或いは平行世界の話と捉えるかは、あなた次第。心がつらくなった時、生きる理由を問うた時には、是非この作品をお読みください。